

氏 名 まつ した りょう へい
松 下 良 平
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号 論 教 博 第 98 号
学位授与の日付 平 成 14 年 1 月 23 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 道徳的規範の伝達へのプラグマチズム的—解釈学的アプローチ
——モダンとポストモダンを超えて——

論文調査委員 (主 査) 教 授 天 野 正 輝 教 授 山 田 洋 子 助 教 授 田 中 耕 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、道徳的規範の伝達についての直観的判断と理論的判断の間で生じている分裂を和解させることにある。それゆえ、本論文で、道徳的規範の伝達からの勇気ある撤退を訴える従来の諸理論（逃走理論と総称する）と、道徳的規範の伝達の必要性や推進を訴える従来の諸理論（闘争理論と総称する）の双方を乗り越え、それらの代わりに道徳的規範の伝達を肯定するための別の新たな理論を築くことをめざしている。本論文は3部11章構成である。

まず、序章で課題と方法が述べられ、

第Ⅰ部「道徳原理の存在基盤の分析と正当性の探究」では、筆者は道徳原理の伝達をめぐる論議が直面せざるをえない本質問題の基本構造を明らかにし、その問題に対する解決案を暫定的に提示した。まず第1章では、道徳原理とは何かについて概括的な説明を行った上で、道徳原理の成立過程の論理的な分析とその実践を明らかにし、そのような道徳原理を伝達することが直面せざるをえない「正当性と権力の対立」の問題について論じた。

第2章では、ポストモダニズムを批判し、道徳的規範の正当化基準を提案した。伝達に値する正当な道徳原理が満たすべき条件として「イデオロギーを超えた道徳原理の条件」導きだした。

第Ⅱ部「道徳原理の伝達を肯定する従来の理論的の諸類型と問題点——闘争理論の批判的考察」では、筆者は、道徳原理の伝達を肯定する既存の諸理論（闘争理論）に対する批判を試みている。闘争理論を大きく4つの類型（①素朴な闘争理論、②〈哲学的〉闘争理論、③ポスト近代的な闘争理論、④逃走理論の反動としての闘争理論）に分類した。まず第3章「古典的な闘争理論」では、①の闘争理論が抱えている論理的欠陥を解明し、②の〈哲学的〉闘争理論を乗り越えるために、客観主義と呼ぶ思考様式への批判が必要なことを指摘した。

第4章では、この客観主義に対する批判が諸々の思想的立場の違いを越えて今日の世界の基本的な潮流であることを確認した上で、その批判の要点をさまざまな角度から明確にした。

第5章では、③の闘争理論や、④の闘争理論の問題点を浮き彫りにした。

第Ⅲ部「道徳原理の伝達を否定する従来の理論の諸類型と問題点——逃走理論の批判的考察」では、筆者は、道徳原理の伝達を否定する既存の諸理論（逃走理論）に対する批判を試みた。逃走理論を大きく三つの類型（①素朴な逃走理論、②客観主義的逃走理論、③ポストモダンの逃走理論）に分類した。

第6章では、①と②の二つの古典的な逃走理論の意味、具体例、問題点が批判的に考察されている。

第7章では、ポストモダンの逃走理論を批判するための第一段階として、ポストモダンの相対主義の克服を試みた。相対主義を克服しうる理論的地平（プラグマティズム的—解釈学的な存在論＝認識論）を、改めて確認している。

第8章からはポストモダンの懐疑主義の克服がめざされる。第8章では、この懐疑主義との対話を通じて、逆にこの懐疑主義から学ぶべき点があることを指摘した。

第9章は、ポストモダンの懐疑主義に対する反論であり、この懐疑主義に依拠したポストモダンの逃走理論がいくつかの重大なアポリアを抱えていることを指摘した。

終章では、論文全体の総括をするとともに、残された課題について言及している。そこでは、今日の社会に広がりつつある道徳（ポストモダン〈道徳〉）のイデオロギー性についても論及している。

かくして、第Ⅰ部で暫定的に提示した、「イデオロギーを超えた道徳的規範が（目的合理的な教育でなく）実践を通じて伝達されるべき」とする筆者の立場は、第Ⅱ部および第Ⅲ部での、道徳的規範の伝達を肯定する従来の諸理論やそれを否定する従来の諸理論との比較考察を通じて理論的に説得力があることを明らかにした。それと同時にとりわけポストモダンの懐疑主義との対話を通じて、道徳原理を超えた「倫理」の必要性への自覚が促されたと述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文の審査結果について以下に述べる。

1) 今日、道徳教育をめぐる理論的、実践的課題は複雑多岐にわたり、道徳的規範の伝達についての語りは、直観レベルでは盛んであるが、理論レベルに眼を転じると道徳教育論の空洞化が進行しているとする筆者の問題意識は明確である。そして、道徳的規範の伝達についての直観的判断と理論的判断の間で生じている分裂の和解の問題に焦点を当てながら、道徳的規範の伝達からの撤退を説く従来の諸理論（逃走理論）と、道徳的規範の伝達の必要性や推進を訴える従来の諸理論（闘争理論）の双方を乗り越え、それらの代わりに道徳的規範の伝達を肯定するための別の新たな理論構築を豊富な文献とその的確な分析によって試みている本論文は、その構想、展開の独自性において高く評価できる。

ここで筆者が試みる直観と理論の和解とは、道徳や道徳教育についての批判的探究が増殖させてきた迷路に出口を見出すことによって、道徳的規範の伝達を可能にするための理論的足場を築き、その足場の上に、直観的常識を再構築することであると考えられる。

2) 道徳的規範の伝達を否定する従来の諸理論は、相対主義と懐疑主義によって支えられるとし、これらの克服を試みる。また、道徳的規範の伝達を肯定する従来の諸理論は、一定の道徳的秩序の確保を目的として、その目的の達成のために有効なさまざまな手段を用いるが、その道徳的秩序の捉え方は、大きく分けて客観主義と脱啓蒙主義という二つの理論的立場に支えられているとしており、これら二つの理論的立場の克服を試みる。その際、筆者が採用したのが、プラグマチズムと解釈学の理論であり、この両者に共通する理論的地平や枠組みを「プラグマチズム的—解釈学的アプローチ」と呼んでいる。

そこでは、啓蒙的理性に対して不信や懐疑を表明する「脱構築」の立場からの批判にこたえつつ、どのように理性を「再構築」するかが争点となる。筆者は、道徳的規範の理論として、ローティ（Rorty, R.）の思想やハーバーマス（Habermas, J.）の理論、あるいはマッキンタイア（MacIntyre, A.）の理論に学びながら、真理や正当性という観念を提示し、伝達論としては、目的—手段関係に依拠した教育的伝達ではなく、共同体実践の中での伝達を再評価する立場を明確にしている点も評価できる。

道徳的規範の伝達をめぐる考察を通して筆者は、①道徳の脱構築の立場と再構築の立場の調停や近代の道徳観とポストモダンの道徳観の双方の乗り越えといった問題に関しても問題解決のための新たな方向性を示唆した。また、②闘争理論と逃走理論双方への批判が、近代教育の登場以前から存在していた文化伝達という営み（実践の中での伝達）を再評価する視点からなされることによって、近代教育を肯定する理論、および近代教育を前提にした「反教育」の考え方の両方が批判されなければならないことを示した点も興味深い。

3) 道徳教育をめぐる複雑多岐にわたる諸理論を比較、分類、整理し、さらに直観と理論の調停を試みるための新たな理論的地平を切りひらいた本論考は高く評価されてよい。しかしながら、本論文展開過程では、次のような問題点があることも指摘できる。

(1) 論の展開に当たって使用されている用語に慎重な吟味が必要ではないか。論を拡散しかねないからである。例えば、独自の用語である闘争理論と逃走理論、二項対立的に使われている相対主義と懐疑主義、客観主義と脱啓蒙主義、支配と解放、教育と反教育、自明のごとく使われているモダンとポストモダンなどである。特にモダンとポストモダンは、時代を表すものなのか思想の特徴を表すものなのか明確にする必要がある。

(2) 多くの思想家を登場させ、思想一般に関する理論的成果から積極的に学びとる筆者の姿勢は貴重であるが、それらを道徳教育論という個別の領域の問題に応用する際、異なる文脈のもとでアナログ的に論証できるかどうか慎重な吟味が必

要である。たとえば、ギブソン（Gibson, J. J）の知覚の理論を用いて、道徳原理を認識する際の認識活動の同型性を指摘できるとしている点などである。

（3）共同体実践の中での伝達が再評価され、したがって共同体実践に参加することこそが本来の意味での伝達につながると説かれているが、共同体の意味、実践の概念が必ずしも明確でなく、リアリティをもった説得力に欠ける。

しかしながら、これらの問題点は、論文の性質上やむを得ない側面でもあり、また、今後の研究課題としても自覚されており、本論文で得られた成果を大きく損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成13年12月13日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。